

報 會 医 字

第 47 号
平成 23 年 10 月 15 日



隣の犬

—— 草場 辰哉

隣の家に「てつ」という犬がいる。

和風のミックス犬であるが、細面の「よか男」である。

お隣玄関横の犬小屋に住んでいる番犬である。知らない人には、よく吠えている。我が家にも声が聞こえる。吠えられた中学生が「怖えー」と言っているの、威嚇力のある中型犬である。

何時ごろからか、私はお隣の玄関先を通るときは、必ず、「てつ」に挨拶をすることにした。「おーい てつ おいおい」などと声をかけている。やはり吠えられた。しかし挨拶は続く。そのうち、「隣のおやじ」と認識したか否か?吠えない。チラーとこちらを見て無視している。それでも、挨拶は続く。そして、最近はずっと、鉄格子の間から鼻先をだして、ゆっくり尻尾を振りながら、クンクン、ペロペロと親愛の表現をしてくれる。

「隣の犬と友達になったもんね」と時々、息子に自慢げに話すも「ふーん」と相手にしてくれない状況は未だ改善せず。

「てつ」君、長生きしてください!!



よか男の「てつ」

ふたたび猫

—— 増田 哲哉

7月1日帰宅すると家の前に知らない幼稚園児が手に黒い物体を持って立っていた。よく見るとそれは生後1週間位の子猫だった。

“隣の公園に落ちていた”とはその子の弁。どうしてうちに持って来たのかと

思っていたら、家内が少し前に会っていたらしく“おうちの人に飼えるか聞いてダメだったら連れてくるように”と言っていたらしい。誰かが捨てていったのか母猫や兄弟は見当たらなかった。見捨てる訳にもいかず獣医さんに連れていくと、体重200gで生後1~2週間だろうとのことだった。ペースト状の缶詰めを与えられたら何とか食べたのでそれを購入して面倒を見ることにした。我が家には前にこの会



4匹目のチビ

報に載せた3才になる在住猫が3匹いるので、折り合いがつかず心配ではあったが、これも縁だから仕方がない。

見知らぬ環境を怖がりもせず、夜鳴きもせず、健気にペーストを食べ、初めから用意したトイレにきちんと用を足すお利口さんだったが、やはり在住猫は皆攻撃的な態度をとるので今の所一匹だけ隔離して飼っている。2ヶ月経った今体重は1kgまで成長し乳児体型から幼児体型になってきた。日々運動能力が向上し運動量が増えていくのを目の当たりにすると改めて生命の持つエネルギーの豊かさを感じさせられる。若さには敵わないかと思いつつながら毎日ジャレられて手に新しい傷を作りながら成長を見守っている。

開業医人生の中で感じる「予感と発想」

—— 村上 茂樹

開業医人生も、早や16年目を迎えたが、先輩の先生方に比べれば、まだ若僧である。そんな若輩の私でも、病状が気になる患者さんの事が自分の潜在意識の中に日々存在して微妙な予感が当たるのを以前からよく経験している次第である。

ある日、大学病院に紹介した患者さんの結果が気になっているとその当日に来院して下さったり、前夜のジョギングの中でふと浮かんだ手術患者さんが翌日に来院されるといった具合である。例えるのも僭越ではあるが、当地出身で“打撃の神様”と讃えられた元巨人軍・川上哲治氏がよく経験した「好調時にボールが止まって見える!」という感覚や桑田真澄氏がPL学園時代の夏の甲子園での無死満塁のピンチに小フライをダイブキャッチして三重殺を成立させた時の「ゾクゾクする予感」などもこれに通じるものが有るのではないかと思う。このような、予感や微妙かつ繊細な感覚は開業医にとって知識・技術の修得と共に非常に大切な生命線であり、体調を整え平常心で診療に日々精進を続けていくことで、この感覚を今後も大切に持ち続けていきたいと考えている。

そういえば、まだ私が小学生の時分に両親からも「少しおかしいな」という微妙な予感のもとに重病の兆候を察知した話を子供心ながらに聴いていたことを思い出す。また、「ムンテラ」という言葉を聞いたのもその頃である。開業医となった現在でも非常に大切な治療であり、日々の診療の中で気付いた「ムンテラ」の新しい手法のヒントや思い付いた診療手技のアイデアを録音マイクに音声入力しておき、それをスタッフが文章化して“診療・手術向上日誌”として新手法や発想を積み上げていく試みも楽しく続けている。

また、学会や講習会でも、出席だけして聴き放しにせず、テキストやノートを帰途の飛行機や新幹線の中で繰り返し読み直して診療に役立つ知識や技術の「引き出し」を増やすよう努めている。

昨今の厳しい医療情勢においても、このように奥深く素晴らしい開業医の仕事の中で患者さんを大切に、少しでもより良い日々の診療が出来るよう精進と工夫を心掛け努めていきたいと考えている。